

エマソン研究序説 (2)

—『アメリカの学者』本文にみるアメリカ精神的独立革命の意義—

伊藤 淳

I 「真なる学者」になるための三要件 エマソンの教育論

先の論文では、エマソン『アメリカの学者』の序の部分について検討してきたが、いよいよこの講演における本体部分に入っていくこととする。

先述したように、エマソンは「Man thinking」、「全人」という思想をよりどころにして、では、そうなるためにはどうしたらいいか。エマソンは実際に講演家であったわけであるから、聴き手を想定して、「そのようなご大層な理念があるのは分かりましたが、どうすればなれるのですか？」という質問は当然予想される。彼はまずそのための方法論、教育論ということを、3点にわたり展開していく。それは、自然、書物、行動というものにわかれる。

1) 自然論

これは、前年 1836 年に発表された『Nature』という書物の圧縮バージョンである。自然論については、先の中で徹底的に論じ尽くしたので、ここでは多少圧縮した話にしているというわけだ。ただ、先の前振りでエマソンが「自分は哲学者になるのではなくて、自然を研究しよう。ナチュラリストになろう」ということで、エマソンの中では一貫して自然に対する関心というのは、学者になる以前から強く持っていたものだった。

彼は、講演家になる以前は、牧師をやっていたのだが、牧師時代の説教の原稿がかなり大量に残っており、その中で特に現代でも問題にされるひとつとして、『天文学』（1832 年）がある。この『天文学』のメッセージを読み取ると、エマソンが自然に対して、なぜこれほど肩入れしたかということが、よくわかる。単なる自然科学への、ニュートラルな意味での知的好奇心ではない。そこにはもっと深い、精神的・宗教的な意味がある。その中で、彼は実際にガリレオやコペルニクスなどを想定して、この

ように言っている。

「聖書は、人間によって書かれた。神は、神が自ら書いた自然を通じて、人間の過ちを正した」

天動説や、ルネッサンス期に起こった自然研究の一番の根本動機は、自然そのものをニュートラルに研究したいという思いよりも、教会によって抑圧された神の教えが、人間によってかなり歪曲されたことに対して、神というものがあるのであれば、万物に顕現しているはずだ。そうであるならば、聖書の歪みを自然の中で、(自然に関しては神が歪めて書くはずはないし、これは人間がつくっているものではないのだから) そこに書かれた真偽を読み取ることによって、人間の側の宗教心や文化意識の歪みというものを変えていくことができる。こうした動機が非常に強くあったのではないかと思う。『自然論』においてももちろん、そうした意識が通底している。

その前提になっているのは、結局のところ、自然を自然としてメカニカルに研究する現代の実証科学とはかなり動機が異なっていて、自然を通じて、精神を発見していく、ということにある。そのときに先述したエマソンの根本思想、「自然は精神の象徴である」という(根本的にこの思想は、スウェーデンボルグの思想をエマソンなりに発展していった、生涯にわたり基調を為すような根本テーゼである)

自然論について『アメリカの学者』の中でエマソンはどういうことを書いているかというと、ひとつは、全人の思想に照らしてみても、学者というのはどうも、イメージ的に言うと、ずっと書斎に籠もって本ばかり書いて、人間的な情味がなくなるという感じだが、それは本来の学者というのはむしろ正反対で、自然の移ろいや、常に風が吹き草が生え、あるいは男女の睦み合いのような、そういう人間の持っている自然の情感に対して、誰よりも深いセンシティヴィティを持っているのが本来である。なぜならばそうした情感というのは、人間の精神を浚渌とさせるところの、一番の根っこ部分だからである。そういうものに対してセンスのない学者は、学者ではない。こう言い切っているのである。それは先ほどの「Man」の思想と通底している。

では、次にどのように自然研究をしていくかというと、大きく分けて、先の『自然論』の中の「訓育」の部分と対応している。最初はやはり、若い学徒は、自然の様々な多様なものを分類したり、比較考量し、検討するという、いわゆるアンダースタンディングな立場にある。知性的に計算的な思考で分類・分析したりする姿勢である。実際、そうすることによって自然に対する興味は強くなり、そのうちにその自然の中にある統一を見るに至る。丹念に分類や分析をするだけで(本来の博物学とは違うの

だが)、二つのものの間にある共通法則、三つのものの共通法則、あるいは線の共通法則というものを見出していく。たとえば、ガリレオが天文学の中で一般的な法則を見出し、あるいはコペルニクスが地動説を発見し、さらにニュートンが天文学の力学と地上の力学が、実は同じ法則であることを発見し、というふうに、常に究極の根拠というものを求めてきた。それは、根本的な人間の知性というものは、原因の原因の原因を探っていくというような、そういう性格を持っているから、どうしてもそういう共通の統一という方向に向かうようになる。この共通の統一を積極的に立てると、なんとなくオカルト的になるが、そういうものを求める方向性というのは、人間の知性の本質といえるだろう。

ただし、そこで留まっているのであるならば、現代の科学と同じであるが、必ずある時点で(カントが言うところの)理性が出てくる。理性というのは、エマソンの言う、アンダースタンディング、または英語の reason とは違い、有限なものを超えて、自然と精神の関わりを見る能力のことになる。根本的な統一ということを探っていくと、(たとえば物質の究極を探っていくと物質ではなくなる)科学者の計算的な思考では分からないところが出てくる。それはむしろ人間の精神に似ているわけだ。そこに不思議な連関があるのではなかろうかと探求していくのは、当然の推移であり、決してマッド・サイエンティストでもオカルト・サイエンティストでもないわけである。(エマソンは、その部分においてはさらに語っている)

そうして、万物の知の根底にあるものを探っていくと、(他に象徴的な譬えとして、青空とここにいる自分というのは、実は共通の根っこから来ているのかもしれない、という暗示を自然研究の最中に受ける。ひとつは葉であり、ひとつは花。その根底にあるものは何だ、というのと、)自然と人間の精神の、さらに奥にあるところの「統一」というものを、どうしても前提にしなければならない。そうでなければ、自然の究極の原因について我々は考えることすらできないのである。それを、エマソンは「魂の魂ではないでしょうか」と言っているのだ。

ただそれは、科学的に論証しようとしているのではなく、一方的に言い切っているわけなので、エマソン本人も、これは非常に大胆な思想であり、一種の夢想のように受け取られてもしかたがないかもしれない、という風に言っている。だが、この精神的な光が、地上的な自然界の法則を表すときに、要するに現代の自然科学というのは、結局のところ、壮大な魂の手の最初の模索に過ぎないのだ。自然科学というのは、ものすごく広大な世界の神秘に対して、ごく入り口に立ったに過ぎないと分かった。

エマソンは何も、究極の奥なるものに対して、自分が解答を与えているわけではない。限界付けている（多少、カントにも通じるところがあるのかもしれない）。

面白いのは、「その自然研究者は、新しい創造主が出現するのを望むような気持ちで、知識が絶えず豊富になることを望むでしょう」「ここに至って、ナチュラリスト（自然研究者）は、自然と魂との間の区別がなくなり、相互に照合し合っていることを知る」「自然の美は、人間の心の美です」と言う。たとえば鬱そうとした雲を見たときに、沈鬱さを感じたり、雲の狭間から一瞬、光が差し込んできたら、一種の啓示を感じたりするように、単なる擬人的な、人間の側からの押し付けではなく、自然そのものがそうした象徴性を持っているのだ、ということを聴いたときに、ふっと腑に落ちるような感じがする。そうすると、結局のところ、自然の法則は心の法則になる。標語的に言うと、古代の格言、「汝自身を知れ」。それと現代の格言「自然を学べ」というのは、ついに同一の記号になるわけである、と言っている。

ここで少し、付加しておきたいのだが、もちろんこれを現代の実証科学的な精神の中で、二つ返事で承諾するわけにはいかない部分もあるかと思うので、そこはプロパガンダという風に受け取っていただければ幸いである。実証ということについては、別の機会に縷々発言していきたいと思っている。

ただ、このように考えると、当然ある疑問が浮かび上がってくるはずだ。それは何かというと、結局、自然そのものが動機ではなくて、自然に映った人間の精神、あるいはその精神の根底になっている「魂の魂」、エマソンが言うところの「神」「大霊」を発見するためであれば、なぜ自然を研究しなければならないのか、ということだ。それならば精神を研究すればいいではないか。そこで、再び冒頭の引用を思い出して頂きたいのだが、ここに非常に、エマソンの、「真なる学者」になるためになぜ自然を研究しなければいけないか、という妙味が含まれているのだ。これは人文主義的には非常によくわかるメッセージであると思うのだが、確かに、自然にも人間の精神にも、永遠なる真理、あるいは神というものは、浸透しているわけである。そして、ではどちらの方が尊いかと言ってみれば、それはエマソンにしても最終的に自然は消えて精神であるのだから、精神の方が偉格は高い。であるならば、精神を研究すればいいではないか、という風にはならず、（実はこれがエマソンの精神論の骨格になるわけだが、）カルマニストが言っているような現代思想ではなく、人間はそもそも穢れているのではなく、本来人間は、自然な真性を持っているのだが、様々な作為や、思い違い、うぬぼれなどによって、その真性を覆ってしまっているのである。実際の

自然は、神が書き込むままに永遠の理法が書かれてあるのに対し、人間の方はそれを覆ってしまっているということだ。歪みがあるということである。この、自然に書かれた理法を鏡にして、人間の歪みを取り除く、というところに、力点があったのではないか。さらにこれは、ルネッサンスの科学者たちの、一番奥なる動機とも触れ合うところがあるのではないだろうか。

そういうわけで、人間が「真なる学者」になるために、自然を研究するというのは、人間の真性を、恣意による不調和から脱することであり、賢しらな思い込みや傲慢さ、様々な憶測から自由になって、ありのままに自他を見るための出発点となる。しかし、これはまだ消極的な条件に過ぎないということでもあるわけだ。偏見から自由になり、素直な心になるということ。それができなければ、本来の学者になんてなれるわけがない。だから自然に学びなさい、ということである。

(この自然論に関しては、付属する様々な興味深いテーマが縷々あるのだが、それはまた別の機会に扱っていききたいと思う。)

2) 精神論、書物 (古典) との向き合い方

そうして考えてみると、単なる自然研究で収まってはいられなくなってくる。人間はやはり、単に自然に即して生きるのみではなくて、精神を持っている以上、自然を超えていくという部分があると思われる。言い換えると、クリエイターになっていく。主体的な人間になっていく。つまり歴史をつくっていくということである。(自然の場合は、歴史はないのだから、) 人間に会って初めて、例えばアメリカと日本における文化史の違い等が出てくるわけで、何か悠久の歴史の中で、クリエイトしていかなければならない。そのときに、一番避けて通ることができないのは、「真なる学者は、過去の精神からも学ばなくてはならない」ということである。

そして、圧倒的に歴史精神に浴する為には、過去の書物とどう関わるか、というテーマがどうしても必然的に浮かび上がってくる。

ここで非常に大事なメッセージがいくつか言われるわけであるが、まず学者の本来の仕事とは何か、ということを明確に打ち上げている。それは、与えられただけの世界の生命を、学者というフィルターを通すことによって、真理に変えるということ。あるいは、死んだ事実を生きた思想に変換すること。(この部分では、いろいろとレ

トリカルに書かれてあるのだが、たとえば「世界は生命の短い行動となって、学者に現れましたが、不滅の思想となって彼の心から出て行きます」等）つまり、生命が真理になり、与えられた人生の中から、普遍的価値のある真理性を抽出して、引き出す、ということである。

その部分を学ばざるを得ないのではあるが、ここに大きな落とし穴があるということも警告している。言ってみればこれは一種の「蒸留」作用、濾過であり、与えられた人生の中から石を取り玉を取っていくわけであるが、その純化の中には、人間である以上 100%ということはありません、必ず限界がある。どんなに優れた学者であったとしても、人間である以上、その制約から完全に自由になることはできないからである。よって、過去の偉人の魂に対して、100%無防備になってはいけないということだ。そこから花を捨て、実を採っていかなければならないわけである。そこにどういった落とし穴があるかと言うと、過去の偉大な文学者や思想家、あるいは学者の、精神やその時代において創造しようとした精神態度ではなく、その結果の部分、形骸化された教えや書物そのものが、いわば金科玉条のものとして神聖視され、それが新たに権威となって自由な思考を封じる。そういった暴君になっていく。そこで、先述した「Man thinking」（考える人間）ではなく、（汲々と文献校訂をしたり、虫食い虫になったり、用語のみを詮索したり、マニアックに書籍を集めて大きな業績をつくったり、膨大な注ばかりを付けて何のための書物なのか忘れてしまった、というような）思考停止型の学者が量産されていくという可能性を警告しているわけである。

本来、何のために学問をやっているかという目的、世界と人間に資するという本来の目的が忘れられる。まず人間があつて、ちょうど農夫が食物を供給するように、学者であっても知識人を代表して、人間の魂を養うための素材を集め、供給するという、その部分が学者の存在価値であるのだが、そこを忘れている場合には、エマソンはこれについてかなり苛烈な主張を言っている。そういうものは、プラスにならないだけでなく、最大の害悪となる、と。その最大の害悪の例が、（これは筆者の注であるが、）宗教的なドグマのことである。

ちょうどイエスが生きていた頃には、かつての天才たちの教えの形骸化した部分と戦った。立法学者（モーゼ、エリア）が行った、人間の生命の原理を訴えたはずであるのが、それが法則・制度になり、その内容や意味を忘れて、形だけが踏襲されて儀式になると、人間の本来の宗教性を蝕む最大の害悪となる。（キリスト教自身も、そのような運命を辿っていくということは、後のエマソンの最大関心事になっているが、

ここでは触れないでおく)あらゆる文化・学問に対して、書物そのものを礼賛したり、人間そのものを英雄視してしまう場合には、これは必要悪ではなく、最大の害悪になるということを言っている。なぜならば、そもそも書物が書かれるもっとも純なる動機、クリエイトしていくということに対して、そうした権威主義は徹底的に逆風、頸木になるからである。それと闘っていかなければならない。

ではどのように書物と向き合うかということ、書物の本来の意味は、我々が新たにクリエイトしていくための、インスピレーションを与えるためのものである。その思想を学ぶのではなく、智慧を受け売りするのではなく、自分が内発的に智慧を発展していくときの、そのためのいわば補助車として受け取るのだということだ。そうすると、ここは非常に際立った言い方をしているのだが、ではそういう風に、本当の意味で書物を読むのではなくて、自らの触媒として読む立場ということは何かということ、エマソンから言わせると(現代の用語とは違うが、)そういう人のことを「天才」という風に言っている。受動的に思考する人を秀才だとすると、「天才」とであると。ただ、ここで言っている天才というのは、現代のロマン主義以降の天才といわれているところの、自然の寵児として何万人にひとりの、特権的な特別な人間というような意味ではなく、万人の中にある健全な資質のことを言っているのである。

天才の語源を言うと(これはカントが縷々展開しているのであるが、)、ゲニウスであって、守護天使・守護霊ということになり、要するにインスピレーションを受ける人、ということになる。さらに言うと、自分の内なる自然から、内発的に智慧を汲み取っていくこと。内なる自然のなかに人間を超えたものがあるから、必然的に受動的にインスピレーションを受けるということになるわけだ。そして、こうしたスタイルがなければ、本を読むことすらできないと言っている。(むしろマイナスになるから、読まないほうがいいとまで。)

過去の教えの殻を捨てて、実の部分を取り出すためには、どうしたってその「真なる学者」の態度として。創造的魂(active soul)というものが要求されるのである。これは現代の学問の方法とは、かなり対照的であろう。

そこから考えると、大学や学問の本当の意味は、知識を集めることでも立派な制度や書物を揃えることでもなく、天才の炎(過去の偉人たちの、結果ではなくまさに精製しているところ)を集めて、実際に現代の青年たちの心に、未来を生きるための穂種をつけて燃え上がらせる、ということ。そうしたものがなくて、制度だけを揃えたところで、全く意味がないということを言っているのである。

ここでエマソンが縷々言うことには、自然研究が絶対必要であると言っているが、しかし私はそのことで、書物の研究や学問研究を否定するつもりはまったくない。ただし、真なる研究者にならなければならない、という意味において、書物を扱ったのであるが、特にエマソンが強調するところの、現代人が必須な学問は、科学と歴史であると言っている。その理由については、(講演会なので聴衆のニーズに応じて、という面はあるかもしれないが、筆者の察するところ) 科学というのは、要するに過去の歴史的な天才たちが、その時代の自然状況、与えられた条件に対して、その中から蒸留し、真理を引き出していった、その元の部分は、時代ごとによって書き換えられるため、元の第一の意味が変わってくるわけである。よって古代ギリシャの思想をそのまま追従して、その時代の自然哲学を鵜呑みにしたのでは、全然話にならない。(それは経済学者でもそうであろう。信長が鉄砲に目を付けて戦略の基点にしたからといって、現代において信長の精神を生かそうと思って鉄砲を集めてもまったく意味がなくなる。) それを現代に置き換えると、現代の水準はどうなるか。こういう意味で科学精神というのは非常に必要であろう。人文科学においても自然科学においても。現代の科学知識というのは、もちろん歴史というのは、そこで与えられた中から彼等がどういうものを引き出したか、という思考のパターンそのものを学ぶのであって、その結果ではないわけである。そうした意味で、未来を築いていくためには、歴史と生物科学という両方は欠かせないという点で、筆者からすると非常に正鵠を射ているのではないかと思う。

3) 行動論

さて、行動論であるが、これは従来の常識に対してはかなりユニークだと言える。学者の要件のなかに、行動論が入っているのである。ここには、通常の学者的イメージへの痛烈な批判が込められている。行動する学者がいるのではなくて(学者というのは基本的に、書齋に籠もって知的な仕事をやっているところに意義がある、という常識があるが、) 学者である以上、行動というものが必要不可欠であるとエマソンは言っている。それはエッセンシャルであり本質的である。「行動なくして、学者はまだ人間であるとは言えない」とまで、言っているのである。このあたりは非常にインパクトのあるメッセージではあるが、もちろん検証をしなければならないのだけれども、議論の前提として、学者の代表者のなかに、先述したように狭い意味での文学研究者

や哲学者だけではなくて、精神に従事するすべての人を入れた中で、その典型として牧師を挙げている。

牧師というのは、(これはあまり学問的な言い方ではないのだが、) 男同士の実践家のなかで、会話の中に入っていくことができない。活動家、実際に現実には生きている人たちが牧師に話すと、本心を言わないで取り澄ましたようなところで、要するに阻害されている。男たちの世界の中で、行動家の世界の中で。これは牧師が学者の象徴だとすると、学者というのは要するに、霞を食って生きていて、現実の場面では無力の人である。その霞に多少の理念や意義はあるかもしれないが、結局、人間としては使い物にならない、というようなところを言っているのだが、ここはエマソンは徹底的にこの常識に対して、闘っていくわけである。

単なる学問だけであれば、それは理念や言葉に過ぎず、世の中を変えて行ったり世の中を感化する実践的な文法になるためには、絶対に行動というものが必要なのである。経験というものが必要なのである、と。さらに言うと、この経験という部分は、先ほどの「Man」(全人)の思想で言うと、学者がたまたま自己を限定して、「thinking」、思索の人として自己限定をしても、その本来の姿の「Man」の部分、学者でありながらその人の人生論はどうなのか、どういう経験をしていったか、というところで、(決定的にどういうところでそれが違ってくるかという、これはこの行動論の哲学の部分は、次の章「学者の使命」で徹底的に展開されるので、ここはいわば消極的な言い方しかしていないが、) 簡単に言ってしまうと、学者がどんなにもっともらしい理念を掲げても、それだけでは、本当のリアリティ、人の気持ちを動かすような血肉となって生きてくることはない。つまり真理にはならない。言い換えると、思想が行動を通して初めて受肉化されるのだ。現実的な力になるのだ、ということを行っているのである。

これが、(また後述するが、) 同じ学者が同じような講演をしても、(たとえば、倫理的な講演をしたり、アメリカは今後どうなるべきかと、精神的なメッセージを言ったとしても、) ある人が言った場合は言葉にしか聞こえない。しかしある人が言った場合には、魂を驚づかみにし、実際に行動を決起させる力を持つ。この違いは何かという、これは語っている言葉ではなく、その学者が思索をしていない生活において、どれだけその思想を実践しているかどうか。どういう生き方をしているか。どういう倫理的な生き方をしているのか。24時間、いわばその部分で言葉を文法のように鍛えあげているか。その部分を抜きにしていった場合は、まさに最初の寓話で言う

ところの、「a thinker」になってしまっているのだと。行動できない思索家になってしまって、人間であることをもう止めている。だから人間に対して、インパクトを与えることなどは到底できない。という話をしているのである。

ただこれは、先にも言ったように、プラグマティズムの行動論とも違っており、(プラグマティズムの行動論の場合は、ある種、倫理性を捨て、結果主義に向かうところがある。また、フッサールの学者の抽象的な思考に向けて、生きた生活の場面に行かなければいけない、というものとも、エマソンの視座から見ると、フッサールはやはりあまりにも感傷的というか、物事をリアルに事実そのものを見るためのスタティックな方法論として、レーベンスヴェルトを言っている。そこに常に実践的人間的な動機が入っていないということで、ちょっと違うな、ということで、レーベンスヴェルト論とも違う) むしろ、実際にその言葉が現実的なパワーを持つためには、どうしても行動が必要である。それは先ほどから言っている「Man」と「men」の違いなのだ。

実際に自分の思想を、その人が書物で書いたり講演している以外の生活において、どう実践しているかどうか。だから学者ほど、たとえば場合によっては、田を耕したり、いろいろなサークルに入っているいろいろな経験を積みなさい、人生経験を積みなさい、と言っているのである。

しかし、これを言う資格が実際にエマソンにあるかということ、「否、」というような、自らにも非常に厳しい部分があるわけである。(これは後記することになるが)、実際にこの思想もそうであるが、後に出てくるアメリカ人に対して覚醒を促すその言葉自体が、エマソンの経験から、徹底的にエキスを抽出して発せられているのである。頭で考えたことではなくて、実際にそのような葛藤の中から生み出した思想であり、つまり生命を持っているということだ。こうしたところも、学問というよりも、もっと深い意味での「生きる」という意味に通底するような、本来の哲学に関わるところでもある。ソクラテス的に言うと、知は知のためにあるのではなく、知はその人の特性や生き方、いかに生きるか、ということに対して、昇華されなければ何の意味もない、ということと同義的かもしれない。

II 「真なる学者」の使命 自己信頼の哲学、本講演のエッセンス

「真なる学者」の使命、それを一言で煎じ詰めると、自己信頼 (selftrust) にまとめられる。これはエマソン自身が講演の中で言っている。これは後に、先ほど述べたエマソンの基本思想である自己信頼 (こちらは「self reliance」を使っている) と同じ内容で、後のエマソンの代表思想になる骨格にもなっており、非常にインパクトがある。だからこれは、エマソン思想の覚醒であると同時にアメリカ精神の覚醒であるとも言えるというような、二重構造を持っているわけである。

エマソンは、最初に個々の議論をする前に、一番大事なメッセージを発している。総論として、これだけは絶対に欠かせない、繰り返しのキーワードとなっている。これは、標語的に読み飛ばすのではなく、内実の伴ったメッセージとして受け止めたい。

簡単に要約すると、「真なる学者の使命」というのは何か、というと、「見せかけ」 (appearance) から「真なる事実」 (fact) を人々に示して、励まし、教育し、導くことである。と言っている。(Showing fact from appearance. Cheer up and raising and guiding.)

この appearance と fact というのは、哲学的な厳密な言葉ではなく、appearance と真理と言っても良いし、reality と言っても良いかと思う。見せかけの姿に対して、本当の、見せかけではない、開眼したところの (仏教で言うと、覚者が見た姿と、いわば無明の中で世界を間違って認識しているあり方、) これを総称して appearance と言っているわけである。

結局、appearance という霧を払って、物事の真の姿を見せることによって、人々を先導していくということである。だからその部分において、学者は、知的探求者であると同時に、その後半には、かなり実践的な部分が入ってくるわけである。その点で、かなり宗教者に近いような気もするのであるが、それをこのエマソンは、非常に感動的なメッセージを畳み掛けてくるのである。(それは実際、筆者が要約などしようもないくらいに、名台詞のオン・パレードであり、これは実際読んでいただくしかないのであるが、読むための動機付けになるというくらいで、聞いていただければと思う。すべてが血の通った、内実のある言霊なのである。単なる学者の戯言ではなく、肺腑から湧き出てくるような、インスピレーションの塊のようなメッセージの連続なのだ。まさにアメリカを変えた演説である、というゆえんが、よく分かる。)

1) 「真なる学者」が払うべき代償 (試練・忍耐) と報い——「代償の法則」の萌芽

最初に、ここは励ましのメッセージなのであるが、「真なる学者」というのは、appearanceにとらわれずに、自分の内なる真実にしたがって生きるのも、それはある意味では、易きにつくのではなくて、ラクではない、ということを行っている。いろいろな言葉を使っているが、人々の無理解や、当時の知的な既得権益者（イエスの時代の立法学者、ソクラテスの時代のソフィストたち、あるいは天動説が出てきたときの教会の権威者等）、現代の知的水準を支えている権益者というのは必ずおり、そういった人たちからバッシングされる。たとえば学会に行ったら孤立する。そして自分が全然進歩していないのではないか、という焦燥、懷疑、自責の念、そのようなイバラの道をくぐらなければならない。あるいは、蜘蛛の巣の上を渡って行かなければならないのだ、等、そうした表現を畳み掛けている。こうした代償を、どうしても長い道のりを、内なる真実に忠実に、人からなんと言われようと、一步一步進んでいかなければいけない、と。そして、それはすぐに報われるわけでもない。まさにここは、後の思想の代表的な二大思想のひとつである、「代償の法則」である。真なる学者としての樹木を实らすためには、辛苦という名の根を張らなければ、大樹は育たない。その部分を抜きにして、成果のみを追っていくと、それは仇花のように、ウドの大木のように、見かけは立派だがすぐに滅んでしまうと。

この部分が、アメリカの若い前途有望な志士たちに火をつけたという事実が、非常によく分かるのだ。なぜならば、現代の日本人もそうであろうが、当時のアメリカの青年たちは、それなりに努力を重ねているのだけれども、深いところでどうしても、コンプレックスがあり、自信を持てない。努力しても成果を持てない。頑張れば頑張るほど、主流とずれていってしまうような気がする。妥協したいような気持ちもある。そのような葛藤のなかで生きている若者に対して、エマソンのこうした大いなる励ましと言える言葉の数々が大変なインパクトを与えたということは、よく分かるのだ。

「そのような学者としての試練の道を歩む過程においては、有能な人の侮蔑を招くこともあるだろう。話をするときに、長い間、どもるだろう。古い哲学者の個人思想や教養を学ぶために、現代流行の思想家を捨てなければいけない。つまり、日陰を見なければいけないこともあるだろう。さらに悪いことには、急病や孤独を、何度も感受しなければならないこともある。社会の流行と、教育と、宗教を受け入れて、旧来の道を、歩みやすい道を歩いていく代わりに、真なる学者は、自分自身の獣道を切り開いていくという苦しみを、どうしても乗り越えていかなくてははいけない。そうすると、

妨げるイバラや、絡み合ったツルにもぶつかることがあるだろう。時には、自責や失望、懷疑、時の浪費なども経験する」

なぜこれを引用したかという、これは実は一般的なアメリカ論のようなかたちで語ってはいるが、先述したように、エマソンの若かりし人生の葛藤そのものだったわけである。日記の文章にも同じようなメッセージが随所にあるのだが、エマソン自身が、こうした道を歩んでいたのである。

仲のいい才気煥発な要領の良い学者がどんどん成功するに対して、自分は彼等に負けないくらいに聖賢な教を学んでいるのに、成果は出ないし、むしろバカにされる。

エマソンの教えが、経験の裏打ちにあるというところを実証するために、たとえばこのようなものがある。『魂の記録』という日記からの引用である。

(引用部分は、彼がそれまでの苦しい劣等感から立ち直り、決然と未来に対して覚悟を定めようとしている、一種の悟りを得たような心境で書いている)

「青春のほしいままな歓喜、楽しい遊戯、金髪と輝く目は、ぼくにとっては何ものでもない。そうしたものの蟲惑、ぼくは身を退く。あるおごそかな声が、ぼくに身を退くことを命ずるのだ。よしんば、こうしたものの行われる場所でぼくの血と額が冷たく、流行と華美とがおしゃべりしているところでぼくの舌が吃り、「美」の力と「壮麗」の祝祭のただなかでぼくが何の優雅さも持ち合わせてはいないとしても、ぼくは、自分の魂が生まれつき卑しいのだとか、その運命はすでに定まっているのだとかいう、性急な結論をくだすことはすまい。」

吃り、というふうにはここでは言っているが、一生懸命根っこを掘っているのだが、どうも生めない。見事な論文を書けない。才気煥発に友人を打ち負かしたりもできない。なんとなく沸騰している状態に対して、それまでは、自分の将来性はないとか、自分なんてダメだ、と言っていたのであるが、この時点で、いや、これは真実の道を歩んでいるのだから、どうしたって、先の appearance の側から見ると、逆風が吹いて来るのだ、というふうに変えが変わる。これはいわば、通過儀礼なのだ、むしろ自分が正しい道を歩いてきた証拠なのだということに、気づくわけであるが、彼はそれをどこか魂の底で知っていたのではないだろうか。

断っておかねばならないが、これは、日記とこの部分の対応関係ということについて

て論じることが目的ではなく、実際にエマソン自身がこの葛藤を誰よりも、自らの苦渋と劣等感に満ちた修行時代の道のりと重ね合わせていることは明らかなのだ、ということである。

これが実は、エマソンの感化力の根っここの部分の中にあるのではないだろうか、と強く思うのだ。先述したように、なぜこの講演がアメリカ人の魂となって、本当の意味で精神革命をやったかという、彼等が若い人たち、むしろ健全な真なる学者の資質を持った、ナイーブで誠実な若者たちの葛藤を、身をもって経験して、それを誰よりも深く味わい尽くし乗り越えてきた、という、その言霊のパワーがあったのだ。そういう意味では、エマソンこそが、代表的なアメリカ人としての存在であるということだ。

こうした部分での悩み方や葛藤、自責の念などがなければ、本物にならない、ということは、とても大きい慰めと励ましになるだろう。しかしそれは耐えること自体が目的ではなく、やはりこの代償を取るということ、根っこを張るその目的は、大樹を实らすという報いの方にあるわけだ。

その代償を払ったことの報いというのは、非常に大きなことである。簡単に言ってしまうと、「真なる学者」の中身に関わる場所であるのだが、最初は消極的で、人間性の最高の機能を発揮する喜びである。少し抽象的ではあるが、真なる学者こそが、世界の目であり、心臓である。先ほど述べたように、時代そのものを照らすところの、目であり、そしてそれがなくなってしまうと、時代の生命力さえもなくなってしまう、ということの、心臓であるのだ、ということである。

まだ成果が出ないときにも、心の内で、本当の真実、真相が見えたら、それだけでも大したことではないか。なぜならば、そのように正しい道を歩んでいる場合には、成功は必ず、代償の法則に従って伴ってくるからである、と言うのだ。

これは、科学的に証明されたわけではなく、エマソン自身の思想の確信であり、宣言である。そして、自分一個の思想の法則、内なる真理、ルールに従って精進した者は、その精進の度合いに正確に応じて、(先ほど言ったように、それが著作であろうと翻訳であろうと、) 多くの人の魂を捉えて、世の中に影響していくことができる。それだけの感化力を持っていく。これ以上にすごいことはあるだろうか、と言っている。

その証明に関しては、先ほど言ったように、実際にこの『アメリカの学者』がその後のアメリカの歴史を、多くの知識人たちに与えたインパクトというのは、とにかく、

これに匹敵するものを 2000 年の歴史において挙げることは難しいくらいに、圧倒的な感化を与えているということだ。その結果としては、良いもの悪いものもいろいろあったわけだが、その感化力の大きさということに関しては、単に内面の誠実さによって報われるという、そうした精神主義的なことは言っていない。必ず、目に見えるかたちで、こうして深く己を掘り下げていった場合には、報われるのだ、と繰り返し言っているのである。

ちなみに、ここで言う感化力ということについて、エマソンは非常に興味深いことを言っている。実は本来の学者の感化力というのは、マーケティング的に周囲に迎合するような物事を探るのではなく、自分の内面の秘密を深く掘り下げ、その鉱脈を掘り当てた場合にこそ、そこにいる聴衆が本心から聴きたいと望んでいる本性を満たすことができる。そのために大変な感化を与えるのだ、というのである。これは、ちょっとした逆説であると言える。自分の個のなかの、その個人性、孤独の井戸を掘れば掘るほど、普遍性が出てくるということである。そのような人間観がエマソンの中にはある。(詩人が深く孤独の中に沈静することは詩人の要件であるし、学者が時流から一步身を引き己の内に沈静するということは、学者の職務であるということ)

深い孤独の中で己の内密の予感を掘り当てた者は、万人のうちに眠る普遍的な真実を呼び覚ますことができるのである、という逆説がここにはっきりとしたかたちとして現れてくるのである。

2) 自己信頼の徳目 自由と勇氣 エマソンの実質的な行動論

最初はやはり、忍耐・試練の時代を、真なる学者は歩んでいかなければならない。これは使命というよりもむしろ、義務であると言っている。真なる学者だからこそ通らなければならない道のりであり、それは必要不可欠なことであるのだ。魂に目覚めた者が、通過しなければならない道。なぜならばその時代の主流に対して、逆風を突いて進むようなところが、どうしてもあることは違いないのだから。それに対して、どうか誇りを持ってください、ということをエマソンは言っているわけである。

ここまでは割合にネガティブさがあるのであるが、彼の講演はさらに前向きに、積極的なものとなっていく。

次のテーマは、自由と勇気である。

すべての人間の徳目というものは、一言で煎じ詰めると、自己信頼というところに集約される。そしてその自己信頼というものは、「自由と勇気」であるのだ、という。

自由に関しては、一行で済ませている。

「自己の本性から生ずる妨害は別として、それ以外のいかなる妨害も受けないこと」

自分自身で心の中の誠実に反していなければ、自分が真実だと思った道は断行する。これが自由である、と言っているのだ。自由と言っても、放縦の自由ではなく、内なる声に対して忠実であるという意味合い（先ほどの天才概念と通じているのだが）で言っているのである。

ただ、それだけでは足りないのだとも言っている。これは、ある意味で常識と正反対なのではないか、というようなメッセージが下されるのだが、それは何かと言うと、

「勇敢であることが学者の職務である」と言っているのである。

勇敢であること、恐怖に打ち克つことが、学者の本来の仕事であり、使命である、というふうに言っているのだ。

一瞬、これは非常に奇妙な感じに受け取られるのではないだろうか。「君は学者であるのだから、実践の場で勇気を持って出て行きなさい」と、「学者としては既に成功しているのだから、今度は勇気を持ってその思想を世に訴えていきなさい」と言っているのだが、エマソンはもっとラディカルなことを言っていて、学者であるための条件、エッセンスや形容の中に、勇気ということが含まれているというのである、と言わんばかりの言い方をしている。それは、冒頭に掲げたエマソンの世界観、そのリアリティの問題と深く結びついている。

自分は学者なのだから、今の世の中の出来事に関して、人間性を疎外するような問題が様々にあったとしても、自分は内省的な生活をしているから、と言って閉じこもるのは、学者にあるまじき行為であり、卑怯である、と言っているのである。

なぜそのようなことが言えるのか、というと、そもそも恐怖というのは、本来あるものではなく、真実を知らない、本当の世界の在り様を知らないということに対して、自分が勝手に appearance を作っているところから、無知から生じるからなのだ。恐怖から逃げている態度こそが、恐怖を恐怖たらしめているのだ。

しかし本当は、(エマソンは恐怖を「恐ろしい獅子」と喩えているが) この獅子が生まれている発生の出所を見ると、意外に大したことはなく、その根っこは非常に浅

いところから出ているのだ。つまり、恐怖と向き合い、格闘しようとするれば、それと戦うことはできる。そして必ず打ち克つことができるのだ。

「世界は、その見せ掛けを見抜くことができる人のものである」

「なぜ、様々な恐怖感や頑迷、盲目的な習慣や世の中の偏見があるかと言うと、実はあなた方が、ただ黙認しているからなのだ」そんなものに戦いを挑んだって、相手はものすごい毒や棘、牙をむき出しているのだから、向かっていっても多勢に無勢、戦うだけで無駄なのだ、というふうに恐れて、手をこまねいているから、相手は凶暴化しているわけであり、実はそれは本当のリアリティではない。その相手だって、不真理や不存在に根っこがあり、盲目的に暴れているだけなので、これが恐怖であるということが分かれば、既に恐怖を与えている当の害悪というものは、その存在の根拠を失い、致命的な打撃を加えたことになるのである、と。

恐怖というのは、学者たちの行動力のなさからではなく、無知から生じるのだ。先ほど言った appearance から始まる。(冒頭に掲げたように「真なる学者」の定義は、appearance から真理あるものを民衆に見せ、導いていくということであるから)

よって、時流に迎合したトピック的な問題に関して、売名行為をしようというような類のものに関しては、身を引かなければならないが、ここに不正があることを知りながら、手をこまねいて見ているだけというのは、学者にあるまじき行為であり、それは言論を持って戦いなさい、ということを行っているのだ。(このあたりは非常にソクラテス的な勇氣に通じるのではないかと思う)

沈静しながらも、やはり学者としての感化力は与えなければならないのだ、と。そのような部分がなくなって、学者の職分をいわば隠れ蓑にして、言うべきことを言わないという場合は、エマソンが考えるところの本来の学者ではなくなっているのである。

そしてさらに畳み掛けるように、決定的なメッセージ——最強の勇氣の原理——を打ち込んでくる。

我々は、かつては皆、神を信じていた。世界創造について、神は世界を意のままにつくった。これは認めるが、しかしこれは億年の昔の話であって、あるいはイエスの時代においては奇跡は起こったかもしれないが、現代においては神は沈黙している、と思いがちだが、それはとんだ間違いである。現代において、生ける神は我々に絶え間なく関わっているのだ。したがって、我々に関わってくる始原の神と、我々は同じ

心を持つことができる。もしそれができるならば、当然、我々の内なる神から見て、周囲の世界は我々にとって害悪に満ちたものではなく、世界創造の神にとっても同じような、プラスチックな意味が変わっていく、ということだ。恐怖の対象ではなくなってきた、自分にとって親しいものになる。さらに言えば（裏返して言えば、）自分が無知であり、心の中に罪悪や偏見を抱えているからこそ、自分の周囲の世界は、石のように無慈悲で、耐え難い過酷な存在のように思えてくる。これがたいていの人の世界観である。だからこそ、彼等の無知・無明から光を当て、真のリアリティに導くということは、決定的な意味があるのだ。そのように、文字通り救済や幸福論に繋がっていくメッセージを孕んでいるのである。この学者としての使命、自覚に目覚めたとき、これは報われて余りあるどころか、最も高貴なる、聖なる仕事であるとエマソンは考え、それに感化を受けた人々が奮い立ったのは、想像に難くない。

「偉大な人は、物資を変えるのではなく、自分自身の心を変えることができる人である」

自分の心を変え、ありのままに見たときに、世界は自分自身の個性の色をつけられて存在する。それまで全く過酷だと映っていた世界が、自分にとって親しみのある、本当の意味で生きるに値する世界になっていくのである。

ここにおいて、認識と行動の区別がなくなってくる。通常は、認識する人と、実践的に世の中に関わっていく人というのは別れているのであるが、エマソンにおいては、世界を正しく見る人が、同時に世界と正しく関わってくる人であって、これは不可避でもって分けることはできないのだ、というメッセージである。これについても、証明を瞬舌したかたちの、魂の直弾のような感じで畳み掛けている。ものすごいレトリックである。

こうして学者の栄光、本来の自己信頼のもたらすところの妙味、面目を描ききった後、翻って、では現代はいったいどうなっているのか、ということが、次のテーマとなってくる。

3) 現代の迷妄と代表的偉人論

「わたしがこうして縷々語ってきたけれど、本当に皆さんに、この言葉が届いているかどうか」とエマソンは言う。「ただわたしの本当の意図は、十分な論証になっていないかもしれないが、わたしは、冒頭で挙げた寓話のように、人間は本来ひとつのものであるという説に基づいて、皆さんに希望を与えたいのだ」というのが真実である。

それに対して現代の人間は、こういった意味においては損なわれており、迷妄の中で右往左往しているように、少なくとも自分の目にはそのように見える、と彼は言う。昔のように、真理の栄光を掲げる人間はほとんど失ってしまった。なぜそのようなってしまったのかというと、先の寓話に照らしてみると、本来の人間が細分化に次ぐ細分化で、マスの社会、その他大勢の大衆、俗衆社会がやってきた。そして今日の世界に住む人々は、言ってみれば虫けらであり、魚の卵になっている。(魚の卵というのは、一度に何万個も生まれることから。) そのうちのひとつのような世界観を持っている。現代の日本人においては、膨大な一億のマスのひとりだというような感覚であろう。たまたま運が良ければヒーローになれるという発想は持っているが、当時のアメリカ人においてもそうであった。その中に、百年、千年にひとりか二人という割合で、本来の「Man」の属性を持った正しい人間（これを偉人、天才、英雄などと言うわけであるが）が出現する。そして、たいいていの人はその英雄のなかに、自らの夢や希望など、自己実現を託すようになる。英雄は我々のなかに生き、我々は英雄のなかに生きている、というようなことである。このような appearance、世界観になっていくと、当然、人間が求めているものは、精神的な価値ではなく、最も分かり易い目標になってくる。彼等にとっては、市場のものとして、金銭や権力など、本来の目的が見えなかった時は、やはり力関係や金銭などというものが金科玉条のものになり、それを追い求めるようになる。

こうした状況において、本来の学者の使命は、と再び振り返ってみると、「そうした状況だからこそ、やはり精神革命を起こさなければいけない」というふうに（ここでははっきりと「革命」という言葉を使っている）言っている。この革命とは、武力による革命ではなく、真なる教養の観念の復旧を行うことである、と提唱している。それはどういうことかと言うと、彼等の信じている世界観は夢遊病者のように歪んでいるのであって、自分が何のために金銭を稼ぐのか、何のために権力を得るのかという、その本来の目的があり、その手段としてこそそれらは正当化されるのであり、手段の方が目的になってしまっている場合は、エマソンの言うところ、夢遊病状態の盲目

になっている。よって、真なる教養の理念を広げていくことで、かつてのソクラテスと同じように、警鐘を鳴らし彼等の目を覚まさせてあげなくてはならない、と。

こうしたことを言える根拠はというと、先ほどの「Man」の思想に戻ってくる。それは「代表的偉人論」とも繋がってくるのであるが、そうして外に自分の他律的な価値観を求めて狂奔しているのだが、それをその人ひとりの人間として見た場合、その一個の人間のプライベートな生活は、至上のいかなる王国よりもさらに優れた君主国であり、敵にとっては最も恐るべきものであり、友に与える影響においては、さらに優しく穏やかになるだろう、と言うのである。なぜならば、人間というものを appearance から脱して、本来の透徹した哲学の目で見れば、すべての一個の人間のなかには、少なくとも可能性としては、あらゆる人間の属性（芸術家、政治家、文学者、等）がすべて十全に持っているのだ。磨き上げれば、そうなるのだと。だからこそ、詩人や哲学者、俳優など、いわゆる偉人や天才と呼ばれるような人たちは、いわば我々のあらゆる特性のある一部分を特化して徹底的に磨き上げる代弁者であって、いつか自分がそれになりうるところのものを、代表しているに過ぎないのである、とっているのだ。誰でも絵を描くことはできるが、画家はそれを特化して徹底することによって、多くの人々に絵の方向性を示す。よってここに至って、冒頭に掲げた、偉人と農夫のような、決定的な懸隔というものとはなくなってくるのである。

（そして、その根底には、神と人間の間の懸隔もなくなるという宗教観があるわけであるが、それはまたの機会にするとして、）たいていの場合、我々は「その他大勢組」であり、一部、運の良い幸運の寵児のような天才のみが、本来の人間になりうるが、その他は日陰である、というような発想がまかり通っているが、これは程度の問題である。だからこそ、「努力論」や「修行論」というものの価値が立ってくるわけである。努力していくことで、偉人を愛するのみではなく、我々は必ず、それに追い付くことができるのである。と書いている。なぜならば、どんなに大事にしている書物でも、それを読み漁り読み終えてしまっても、それだけでは人間は飽き足らない。どんなに感銘した本であっても、次から次へと自分の魂を養う糧を更新していくではないか、と。それは何を意味するかというと、少なくとも、ひとりの筆者の目を通して見られた普遍的な万人共通の観点を、自分が創造したことではないが、それに深く共感することによって、自分自身がその書物を書いた人そのものになり、言ってみれば、その人を追い越したことにもなりうるのではないか、と。

次々と水槽の水を飲み干していくが、どんなに飲み干したとしても、我々というの

は、最終的には（良い意味で）満たされない。さらにもっと豊かな食物、心の糧に関しては、これで満杯ということはありません、我々を永久に養ってくれる人は、ひとりもない。

そうした人間の本性というのは、まるで天の高みにあるような「Man」と言っているが、実は万人が持っているものなのだ。人間の精神は、言ってみればひとつの中央の火山であって（エトナ山から炎を出すと、その近隣のシリーの岬を照らす。レスピオス火山から出れば、隣の町のナポリのブドウ畑も輝かす、と比喩的に言っている）、人間の根底には、すべての人々を生かしめる、ひとつの魂がある、と。（これはもちろん、「大霊」や「神」と言うものに通じているため、一番深いところまで掘って行った場合には、そのような圧倒的なインパクトがあるだろう）この「Man」という意味は、単なる抽象的な理念を超えて、彼の持つ世界観、真神観のようなものに繋がっており、この部分においては非常に大きな意味を持ってくるであろう。

1) 未来創造物語 「アメリカの学者」と未来を待望する民族への応援歌

そして最後は、今までの話をすべて踏まえて、アメリカ人に対する最終的なメッセージを訴えている。未来創造への導火線を付けているようなくだりである。ここは筆者から言うと、「アメリカの学者」とすべての未来を求める全民族、人類への讃歌であり、応援歌であるようにも聞こえるのである。

ここは少し、今までの沸騰温度を下げ、歴史的観点に立ち、歴史的な意識を掘り下げながら説明していこうと思う。

エマソンが言うところの、近代科学以降の現代人（近代人）というのは、歴史の三段階に大きく分けて三番目に当たる。ギリシャ的、ロマン的、瞑想的時代に分けた中での、「瞑想的時代」に入っている。一番目のギリシャ的というのは、おそらく素朴な少年期という枠組みである。ロマン的というのは、実際に体力もついて、制度やかたちにしていこうという特徴がある。それに対して、現代人（近代人）というのは何かというと、自分が行っていることの意味を問い直しており、懐疑や不信などの悩みを持ち、それを瞑想的に自分自身を振り返るように（確かにギリシャ人は、自分自身の本来のあり方について様々に自意識で悩むことはない。野生のような健全な生命力に

溢れてはいたが、それに比べると現代の近代科学以降の人々は、) 自分の学問はこれでいいのだろうか、この生き方はどうであろうか、などと、悶々と悩んでいる。現代の日本でも、多くの人がそうであるように、当時のアメリカ人もおそらくそうであったのだろう。

だからこそエマソンは、現代をつぶさに見るところ、古代の健全なギリシャのような自然に即した輝きもなければ、ローマ人的な世界にしっかりとした制度をつくっていくような堅実さもない、現代人というのは非常に脆弱な存在であるというふうに悩んでいる。(エマソンはここでハムレットを引き合いに出し、「考え込んで青白い病人じみた色をしている」と言っている。)

前章の「忍耐」という部分を語ったときに、悩めるということ自体、実は井戸を掘っているのだという話をしたが、ここでもはっきりと、「このように皆が懐疑を持ち、自分自身に対して内省するということは、悪いことなのか」という問題提起をしている。そうではないのではないかとエマソンは言いたいのである。なぜならば、我々は果たして本当に眼を閉じ、盲目になりたいのだろうか。そうではないだろう、と。我々は自然や神を見極め、真の杯を飲み干してしまうことを恐れているのだろうか、と。恐れだと思っているものは、自分自身の見せ掛けの奥にある、神や真理を見るとき、あの幸福への恐れにも似たものなのではないのか、と。そこで、彼は決定的なメッセージを送るのである。

「わたしは、文学者たちの現代に対する不満は、(あまりにも内省的で自分自身のあり方に対して常に疑問を提示しているというような態度は、決して悪いことではなく、) 単に彼等がその祖先の精神と同じ精神を持たず、また来るべき時代は遺憾ながら未知であってあてにできないという事実を、表明しているにすぎないと思う」

つまり、人間として自覚を持とうとしていった場合、未来に対して目が開けていくわけであるが、未来は未来であるがゆえに未知であるのは当然のことである。あてができないのが未来であるのだから、これはあたりまえではないか、と言っているのである。ゆえに、こうした未来への恐怖感と戦っていくことを抜きにするということはすなわち、過去の人となることを無条件に選択していることと同然になるわけである。これは「自然論」の冒頭でも言っているのであるが、現代のアメリカ人はあまりにも過去思考になりすぎている。過去の遺産ばかりに意識を向けている。これは実は人間の本来持っている「内省」による、未来に対して目を開いていくということへの恐怖

感であり、実存しないものに対する恐怖感なのである、ということを教えているのである。

ではこれからアメリカ人の文芸や哲学はどういう方向になるか、その前兆は至るところに見ることができる。かつてのヨーロッパであれば、文学や神話というものは、特別の貴族や特権的な聖なる場所にしかなかったのであるが、これからアメリカはそうではないと。わざわざ遠い外国に赴き、宮殿や神殿を巡らなくとも、今自分が足を据えている、無頓着な足の下に踏みつけているその場所こそが、突然すべての外国よりも趣のある場所になるのだ。貧民の文学、小児の感情、街上の哲学、家庭生活の意味などが、現代の話題であるのだから。これはものすごく大きな意味での前進なのである、と。なぜならば、社会はひとつの個だと考えて、それまでは頭や手足など一部の部分のみが真理や聖なるものであったのが、全身に光が拡がり、四肢が活動し、身体全体が躍動して、生命の流れが、末端の手足の先に至るまで満ち溢れる。これは活力の前提である。だから彼は、もうすでにかつての偉大なものやロマン的なものを必要としないのだ、と言う。

「わたしは、ありふれた平凡なものを胸に抱き、卑近なもの、賤しいものを捜し求め、こういうものを師とする」

ここで少し余談ではあるが、その後、実際このような考え方がアメリカの詩や文学の主流になってくる。エマソンの一番弟子は、ひとりはソローであり（彼は「自然論」に影響を受けた）、もうひとりはホイットマンである。ホイットマンが「草の花」で言っているのはまさに、私が謡うのは一部のエリートではなく、カーペンターの詩であり、農夫の詩であり、そこにアメリカの声が息づいているのだ、ということである。これがアメリカにおける本当の意味での文明の民主主義であるというふうに言っているのであるが、この淵源がエマソンのこの文章にあることは間違いないであろう。

ちなみに、内村鑑三はエマソンとホイットマンに圧倒的な感化を得、それまでのイギリスの詩などというものはホイットマンとはほとんど比べものにならないとまで言っている。なぜならば、我々にとっては、イギリスの詩は過去の栄光を陳列室のように飾っているような感覚なのであるが、エマソンやホイットマンのメッセージというのは、未来を開こうというところにある。内村鑑三自身が、現実の偏見との闘いの

なかで一步を進めたいと思っているところへ、最大の勇気を与えてくれたのが、意外に（道徳的には少し問題があるような）ホイットマンの詩であったようだ。

様々について縷々述べてきたのだが、最終的に学者の耳を貫く、他に勝るただひとつの教訓があるとするならば、つまり学者の究極の使命があるとするれば、（学者というのは知識の総合大学でなければならない、と言った後で、）次のようにまとめている。これはこの講演の全体のエッセンスを集約したようなメッセージとなっている。

「世界は無であり、人間が一切である。あなた自身のうちに、全自然の法則があるが、あなたはまだ樹液の滴粒が、いかに上昇するかすらも知らない。（それすらもあなたの内面の中にあるのだ。）あなた自身のうちに、『理性』のすべてがまどろんでいる。だからこの理性を紐解き、すべてのことを知り、それを実践していくことが、あなたがた学者の使命であるのだ」

そうは言っても、現実の学者というのは、上品で怠惰で権利主義で、なかなか若い人の目を見ないし、多くの若者は学問に従事しようとしても就職難に陥ったり、周囲に認められないなど様々に悩み苦しんだり、嫌悪にかられ、場合によっては自殺さえする。そうした状況を、もちろん知らないわけではないのだ、とエマソンは言う。

ただどうしても言いたいのは、もし一個の人間が、そうした外向きの不毛状態から一度自分の内に目を向け、自分の直感のみを根拠として、これを守れば、巨大な世界が彼の方に進みよってくるということを、あなた方青年たちは、まだ知らないのではないだろうか。少なくともわたしはそれを感じている、と。彼等と同様に、有望な多くの青年に対して、目先の就職難という障壁に現在際会している多くの人々も、このことを忘れているのだ、と言う。自分の心のなかに広大な王国があるということも、忘れている。だから、忍耐が必要なのであると言っているのだ。善良な、偉大な人々の霊を友にして、忍耐しなくてはなりません。それに対しての報い、慰めとしては、前途に無限の生命がある。だからこそ、真なる学者の為すべき仕事は、そうした法則原理を研究し、これを伝え、内に内在する叡智を紐解いて得たこの直感を世に広め、世界を変えていくことではないだろうか。と、こう言っているのである。

最後のセリフは、すでに“アメリカの学者”という形容詞も一切取り払い、このように述べている。

「真なる国民は、各人が、すべての人びとに靈感を与える『神の霊』によって、自分もまた靈感を与えられるものと信じて、初めて存在するものなのである」

内省が即、インスピレーションとなり、それは普遍的な存在である神に直結している。それが、国民であることの条件であると彼は言うのである。これは、全アメリカ人に向けて発しているメッセージではないだろうか。

同じような状況で、特に現代の日本人にとって、このメッセージというのは、やはりどう受け止めるかということを考えなければいけない挑戦状であるように思えてならない。筆者は、それに対して少なくとも自分自身に関して言えば、真摯に受け止めたい。それをどう伝えるかどうかという点においては、また別問題となるため、他の機会に譲ることにしたい。